

表情認知の正確さに及ぼす familiarity の効果

光星学院八戸短期大学 ○遠藤光男

東北大学 丸山欣哉

表情の認知に顔の familiarity によって差異があるのかどうかを、刺激人物 (SP.) と交友関係にあるものとそうではないものとの表情認知の正確さを比較することによって検討した。3 人の SP. それぞれに Neutral と 7 つの情動カテゴリー (Happiness, Surprise, Fear, Anger, Sad, Disgust, Interest) を表出している刺激写真を作製し、被験者 (S.) に情動を表わす 31 用語の中からそれぞれに最も適当なものを選択することと、SP. に対する familiarity を 7 段階評定することを課した。SP. ごとに S. 45 人の familiarity の評定値と正答数の相関係数を求めるとそれぞれ正の相関を示しているが有意差は得られなかった。familiarity の評定値が高い S. 群と低い S. 群を SP. ごとに比較すると全体の正答率では 5~10% の差があるが、有意ではなかった。表情ごとにみると、Fear, Anger, Sad で差がある傾向がみられるほかは、ほとんど同じ成績を示していた。ANOVA の結果は、1 人の SP. でのみ familiarity と表情の交互作用が有意であった ($p < .05$)。

研究室発表 B-II 9:20~11:00 B室 (201, 202)

知覚 1 (感覚・順応)

座長 佐藤愛子

視覚の光強度感受性と光持続感受性の個人内関係

: 個人内関係の検討 (3)

浜松医科大学 佐藤愛子

感覚の研究は、視・聴その他の各感覚系をそれぞれ個々のクローズドシステムとみなして取扱い多くの知見を得てきた。しかし感覚に関する諸機能は各個人の中で、ある場合は相互依存的に、他の場合には相互独立に作動しているのではないか。前報 (佐藤, 1983 年第 2 回) では刺激持続感受性を、視覚と聴覚の $\Delta t/t$ 値を指標として検討し、個人内相関 ($r = .445 \sim .744$) のあることを示した。本報では、刺激強度応答感受性と刺激持続感受性との関係を、視覚について、光覚弁別いき値の ΔI と Δt (強度変化持続一定のいき値と、強度一定持続変化のいき値) で検討した。1 名の被験者は ΔI と Δt に高い相関があったが、他の 3 名の相関はゼロに近い。視覚の刺激強度応答・持続応答両感受性は個人内では独立に作動していると推測できる。この両感受性の個人内相互独立は、質問紙による 316 名の結果 (佐藤, 1986) から示されている。いき値測定でも更に多数例が必要である。

刺激光の大きさと精神測定関数の傾きの関係について

京都大学 乾 敏郎

種々の直径の刺激光に対して精神測定関数を求め、刺激光の面積と精神測定関数の傾きとの関係をしらべた。精神測定関数は、

$$P = 1 - \exp(-(I/\alpha)^\beta)$$

を採用した。この式を用いると $I = \alpha$ で $P = 0.6$ になり、 $I = \alpha$ における精神測定関数の傾きは β に比例した値になる。そこで刺激光の面積と β の関係を求めた。その結果、(1) 刺激光の大きさが空間加重領域より小さいときは、 β の変化は小さくほぼ 3.0 である。(2) 空間加重領域より大きいときは、刺激光の面積とともに急激に β の値は上昇する、などが明らかにされた。確率加重だけでは β の変化は生じないので、この結果は刺激光のエネルギーが物理的に加重されていることを示している。我々がこれまで発表してきた網膜のモデルからこれらの結果が予測されることが明らかにされた。

Examination of the Attraction Theory in the Weight Figural Aftereffect

The Pennsylvania State University

Kiyoe Mizusawa

In their experiments, Ganz (1964) and Ganz and Day (1966) found that the displacement (apparent shrinkage) of the contour of the test figure is less when the contours of inspection and the test figures are very close. After that the displacement increases to a certain interfigural distance; then it begins to decrease. The results are approximately the same as the distance paradox in visual figure aftereffect demonstrated by Kohler and Wallach (1964) and in kinesthetic figural aftereffect, by Kohler and Dinnerstein (1947). However, Ganz (1964) also found that a very small interfigural distance between inspection and test figures, such as 0-10 minutes arc of visual angle, creates a negative figural aftereffect instead of displacement. Ganz (1964) and Ganz and Day (1966) called the negative aftereffect the attraction effect. The present research examined the attraction effect proposed by Ganz (1964) and Ganz and Day (1966).

Experiments were performed by the method of constant stimuli in which the standard stimulus weight used was 100 grams, comparative stimuli